

米国留学中の教会生活

大学地球社会共生学部教授
村上 広史
MURAKAMI Hiroshi



米国留学経験者には、充実した研究環境のことはもちろん、豊かな自然やキャンパスの美しさ、そして人の気さくさなど米国滞在のすばらしさを話したがる人が多い。私もその一人だが、私の場合はそれらに充実した教会生活を追加したくなる。現代はインターネットで海外の教会の様子も容易に知ることができる。しかし、ネットで得られる情報と実際の教会生活で経験できることとの間には大きな違いがある。そこで、私の米国留学中の教会生活を振り返って、ネット情報では得られないような経験を共有したい。もちろん、30年以上前の話なので時代遅れのことも多いが、今でもつい最近のことのように思い出す喜びや感動を感じ取っていただければ幸いである。

留学

渡米した時、私は既に30歳の社会人で、結婚

して2歳の子どもが与えられていた。初めて飛行機（国内線）に乗ったのがその3年前の新婚旅行の時で、初めて海外に行ったのは結婚1年後の学会出張だった。したがって、社会人でありながら、飛行機に乗るのが3回目、海外に行くのが2回目で留学するという、今思い返すと珍道中必至の状況だった。にもかかわらず、留学生活は、私たち家族にとって教会生活中心の貴重な2年間となった。

留学先は専門分野が同じ教授がいるジョージア大学で、アトランタから車で1時間半ぐらいのところにある人口4万人余りのアセンズという町にあった。他の大学同様、キャンパスには収容人員9万人余りのアメリカンフットボールスタジアムがある。2021年シーズンは、同大がタイトル戦で宿敵アラバマ大学に勝利し、41年ぶりに全米チャンピオンになったので、地

教会

次の日は日曜日だったので、早速お世話になった牧師の教会の礼拝に出席した。会員数が2000人ぐらいの保守的な南部バプテストの教会で、会堂は綺麗な服装で礼拝に集った人たちであふれていた。しかし、礼拝が始まって牧師が登場した時、私たち夫婦は度肝を抜かれた。前日お世話になった「オジサン」が、真っ白なワイシャツにネクタイ姿で別人のように颯爽と登壇して、力強い説教を始めたからである。しかも、彼は原稿なしで聖書を片手に1時間近く話し続けたのである。そのような説教者が米国の教会では珍しくないことに気づいたのは、後日さまざまな教会の礼拝の様子をテレビで見ながらであった。前日の「オジサン」のイメージからのギャップが大きかったせいか、その時に受けた衝撃は今も鮮明に記憶に残っている。

礼拝が終わると、一組の上品な老夫妻が近づいてきて南部訛りで声をかけてくれた。大学で学ぶ留学生を教会の活動に招いて支援することに重荷を持っているご夫妻だった。その後も毎週このご夫妻と一緒に礼拝に参加することになり、初めて集った教会ではあったが、すぐに居場所を見つけることができた。

同じ町にある他の教会堂では十字架のある高い尖塔を持つものが多い中で、この教会の古い教会堂には尖塔はなく、建物も地味なデザインだった。しかし、教会とは建物ではなく、キリストのからだとして御言葉によって霊的に養わ

れ、祈り合い、助け合い、福音を社会に伝えていくキリスト者の集まりであるということに改めて気づかされた一日となった。

恵み

2年間の留学期間中、毎週の礼拝説教は聖書の御言葉について深く学ぶことの連続だったし、毎回招きが行われたので、自分自身の信仰にチャレンジを受けることも多かった。また、水曜日の夕方の祈禱会での説教も聖書を深く学ぶ良い機会であった。理由は説教者の聖書に対する知識の多さと霊的な解釈の奥深さである。それまで「レビ記の壁」を越えられなかった旧約聖書の理解を他の書物にも広げ、聖書を学ぶことの面白さを実感することができたことは大きな恵みであった。また、そのような説教を聞く中で“God is in control.”という言葉を改めて学び、自らの留学生活を通して実感できたのは幸いであった。

交わりでも、前述の老夫妻が中心になって、きめ細かな支援や他の信徒の方々との交流の機会をいただいた。毎週の祈禱会前の夕食会に加え、感謝祭、クリスマス、イースター、独立記念日などの主な行事に誘っていただいたことはもちろん、ことあるごとに自宅での食事などに招いていただいた。1年目の終わりに次男が生まれた時も、出産時に長男を預かっていただいた。また、家内の退院後は教会員の方々が毎日交替で食事を届けてくれた。日本と違って出産

元は大いに盛り上がったようである。

私たちは家族が30年余り前にアセンズに着いた日は、そんなアメフトのホーム開幕戦が行われる9月最初の土曜日だった。日本でお世話になっていた宣教師の温かい計らいで、町の教会の牧師がアパート探しを手伝ってくれたとのことだった。ビックアップトラックで現れたその牧師は、普通の「オジサン」という雰囲気の人で、初対面の私たち家族にも気さくに接してくれた。アパート探しだけでなく、家具店で当座必要な家具などの購入を親身になって手伝い、自分の車に乗せて契約したばかりのアパートまで運んでくれた。「教会を選ぶ際には今日のことを義理に感じる必要はないよ」と言い残してその牧師は帰って行った。

後2日しか病院に滞在できなかったので大きな助けとなった。

こういう教会生活をしていると、自然に奉仕もしたくなる。言葉の壁があるので選択肢は限られていたものの、聖歌隊に入って礼拝で讃美するのは歌詞を見ながら歌えるので私でも可能であった。祈禱会後の聖歌隊練習も、音楽牧師のお笑い顔負けの軽妙トークの中で笑いが絶えない良き交わりの時であった。もともと、楽譜が読めないのにテナーとして参加した私は時々音を外していたため、ピアノが弾ける家内に私のパートを録音してもらい、通学中の車で練習する必要があった。

留学後

このような教会生活は、留学後も私の信仰生活に良い影響を与えてくれたと感じることが多い。特に、インターネットの普及で、米国の教会が提供するリソースに容易にアクセスできるようになってからは、毎日のDevotionに活用させていただいている。また、好きな説教者の説教をYouTubeで聞くこともあり、いつもチャレンジや励ましを受けている。

3年余り前に青山学院大学の勤務が決まって、大学の略称であるAGUの文字を見た時、懐かしい思いがして、つい笑みがこぼれてしまった。留学先大学の略称がUGAだったからである。ここでも留学中と同様に“God is in control.”ということを実感したのであった。